カンボジアと私

高校一年　Y・M

飛行機から見たカンボジアの景色は思った通り汚かった。灰色によどんだメコン川、一面に広がる茶褐色の畑。その時は期待というより不安のほうが大きかったと思う。「この国で二週間も生活が出来るのか。」と。そして、これから始まる素晴らしい経験など知る由もなかった。

そもそも私が途上国に留学に行こうと思ったのには訳があった。ここで説明しておこうと思う。それは、小学生の頃家族とエジプトに旅行に行った時のことだ。はじめての途上国であり、はじめてのアフリカ大陸だった。ピラミッドやスフィンクスなどの古代遺跡ももちろん見た。しかし、私の記憶には殆どない。覚えているのは、現地の人々の顔だ。どの人もみんな悲しそうな顔をしていた。食べ物を恵んでほしいと何度もせがまれたが、当時の私にはどうすることも出来なかった。とにかく怖かった。そして、こんなにも貧しい人がいることにただただ驚いた。この出来事からもうすぐ十年が経とうとしているのに私は忘れられないでいる。どうすれば良かったのかを考えていて寝られない日もあった。そんな時に、世界中の国から集まった高校生と途上国でボランティアをするというプロジェクトを見つけた。真っ先に「これだ。」と思い両親に相談した。そして、距離や安全への考慮、また、アジアの途上国に行ってみたいという私の思いもあって、アジアの最貧国の一つであるカンボジアでボランティア留学をすることに決めた。

次にカンボジアでの私達の活動やその具体的なエピソードを紹介しようと思う。現地での活動は、主に四つあった。そして全ての活動場所は、プノンペン郊外の貧しい公立の小学校だった。最初に言っておくが、どれも大変有意義な活動であったと思う。

一つ目の活動は、壁や窓のペイントだ。この学校の壁は、何年もの間色塗りがされていないせいで見栄えがとても悪く、かなり汚い

状態になっていた。そこで私達は、さまざまな色を使って気持ちが明るくなるようなペイントをした。ペイントをしている最中、窓を開けて、子供達が、手を合わせて

「ありがとう。」

と何度も何度も言ってくれて、心がとても温まった。うだるような暑さの中もっと頑張ろうという気持ちになれた。

二つ目の活動は、Teachingだ。カンボジアには、箱（建物）だけあって中身（先生）が不足しているという深刻な問題がある。背景にあるのは、先生の給料の低さだ。この学校でも先生はいるものの七十五歳を超えたであろうおばあちゃんが教鞭を執っていたのだから驚きだ。私たちは、彼女らのためにいくつかのクラスに分かれて先生の代わりに授業を行った。英語をクメール語が話せるコーディネーターの人がたまに見回りで訳してくれるといった具合だ。授業の内容を一から考え行わなければならず、これが英語のコミュニケーション能力の低い私にはとても苦労した。同じ教室のメンバーには本当に迷惑をかけたと思う。でも、子供たちの笑顔はやる気にもつながり、毎日一時間以上かけて準備していた。ある時は、私が日本から持ってきた折り紙を使って、ハートや紙飛行機を折った。またある日は、アルファベット順に英単語を教えてあげたり、色や動物、気持ちや形などの単語を教えてあげたりした。これ以外にもいくつか授業をしたのだが、特に印象に残っている授業は気持ちを表す英単語を教えていた時のことだ。私は、靴を履いているのを今まで見たことがなかった男の子に、

「Are you happy?」

と尋ねた。すると男の子は、当然というように

「Yes.」

と答えた。正直、男の子がこの意味を理解してくれたかは分からない。しかし、与えられた環境でたくましくでも楽しく生きようとしていることが伝わってきて、私の心は打たれた。この子の未来が明

るくなるようにと心から願った。子供たちに授業をしに来たのに、学んだり、考えさせられたりする事の方が多かったと思う。

三つ目の活動は、駐輪場作りだ。私たちが来る前は、自転車を校庭に置いていたせいで遊ぶ場所が少なくなってしまい、またそれがケガにも繋がっていた。そこで、これらの問題を解決するために、教室の横の空き地に駐輪場を建てるという計画を立てた。手順としては、はじめにごみ拾いを行い、地ならしを行い、コンクリートで固めるといった具合だ。広くなった校庭で子供たちが思いっきり遊んでいるのを見た時、私の眼には思わず涙がこぼれた。この作業は、ボランティア同士が協力することが多く、お互いの仲が深まったと思う。歌を歌ったりして乗り切った。

四つ目の活動は、ゴミ問題に関するワークショップの開催だ。リサイクルの重要性を説明し、その後は、子供たちみんなで学校周辺のゴミ拾いを行った。ワークショップの開催に当たり私たちも途上国のゴミ問題について調べた。すると、私が思っている以上に深刻な問題があることに気付かされた。例えばカンボジアにあるペットボトルをすべて回収してリサイクルをするには二百五十年の歳月がかかるそうだ。その背景にあるのは、ゴミをゴミだとは理解しておらず、リサイクルという言葉すら知らない人が大勢いるということだ。その状況を少しでも改善するために実際に行動できたのはとても良い体験だったと思う。また、はじめはよく分からなそうな顔をしていた子供たちも最終的には分かってくれて、実践してくれた時はとてもうれしかった。

以上がカンボジアで私たちが行ったボランティアとしての主な活動だ。

このボランティアに参加するにあたり私には大きな懸念事項があった。それは、ボランティアをやる意義だ。きっかけは友達から言われたこんな一言だ。「ボランティアって偽善者じゃん。それに、お金をあげることが途上国の人にとっての一番の幸せだよ。」と。私は、悩んでしまった。「自分は偽善者なのかもしれない。」と。

実際留学が終わってしばらく経つが今もそれに対する明確な答えは出ていないし、今後も出ないだろう。しかし、あの子供たちの底抜けの笑顔を見た今、そんなことを考える必要などないと思う。あの子供たちにあの笑顔を作れただけでも私たちの活動に意味があったのではないだろうか。と同時に、笑顔の大切さ、言い換えるなら、笑顔は人の心を満たしてくれるということも学んだ。国際協力というのは、一方的な支援で成り立つものではなく、目と目が合わさって初めて成り立つものだと思う。だから、私たちの活動は無駄ではなかったと胸を張って言える。

私は、将来途上国支援に携わっていきたいと考えている。そういう意味でも今回の体験は有意義で、実りあるものであったと思う。また、その時は、今よりも相手のことを思いやり、意思疎通のできる人になりたい。

最後に、このボランティアに参加させてくれた両親に感謝したい。そして、ボランティアをやり切った二十六人の仲間たちに「オークン（クメール語でありがとうの意）」と言いたい。